

札幌市における創価学会員の現状 — 調査票調査結果報告

猪瀬 優理

The Current Situation of Soka Gakkai Members in Sapporo — A Report of the Results of a Questionnaire Survey

Yuri INOSE
(June 2003)

第1章 本稿の課題と調査の概要

本稿は、札幌市在住の創価学会員を対象とした調査票調査(2002年11月実施)の結果を報告するものである。本調査は、親を信者に持つことによって宗教的環境で育つ二世信者がその信仰を自らのものとして引き受けていく「信仰継承」の過程の解明に必要な資料を得ることを目的として行われた。二世信者の信仰継承は教団成員の再生産を意味しており、教団組織の維持の上でも重要な課題である。しかし、これまでの宗教社会学的研究において中心的には取り上げられてこなかった。本稿の課題は、調査結果の分析を通して創価学会における信仰継承のあり方の一端について示すことにある。

創価学会は日本最大の新宗教集団であるが、日本国内においては長らく大規模な調査票調査は行われてこなかった。本調査は、札幌市という限定された地域での調査であるが、比較的大規模な調査票調査を実施したものである。本調査は設計上不十分な点もあり、札幌市の全創価学会員の現状を知るという試みが完全に成功しているわけではない。しかし、調査から得られた結果は、有益な資料となると思われる。このような観点から、本稿では回答者の属性についても明らかにする。

本研究の母集団は、北海道創価学会に所属する札幌市在住の活動的会員である。したがって、この調査の回答者である二世信者はすべて信仰継承した人々とみなすことができる。サンプリングは、まず、学会側から提供された札幌市にある全地区のリストからランダムサンプリングをし、41地区を対象地区として抽出した。そのうえで、札幌市全体の壮年部、婦人部、男子部、女子部の比率に合わせて人数を割り振り(8名、14名、5名、3名)、一地区30名づ

つ調査票を地区の担当者に渡し、各地区で対象者に配布してもらい、各回答者に郵送で返送してもらった。全サンプル数は1230票である。多様な方への配布を依頼したが、具体的な対象者への配布は、地区の方の人選に依存しているため任意抽出である。そのため、調査結果には限界が伴うが、本稿で扱うデータは現段階で得られる最善のものである。

調査の実施は、2002年11月~12月である。配布した調査票1230票のうち、回収された有効票は822票で、回収率は66.8%となった。全構成員のうち、男子部は全体の16.2%、女子部は9.3%、壮年部は25.9%、婦人部は46.6%を占めており、この比率に割り当てて前述のように調査票を配布した。その結果、回収票は、男子部11.5%、女子部9.7%、壮年部27.8%、婦人部51.0%であった。実際の活動状況では婦人部が活動者の大半を占めることから見て、ほぼ順当な比率とみられる。

次章から、回答者の属性を大まかに把握した上で、信仰継承の基盤となる回答者の家族状況について検討し、さらに二世信者に対象を絞って信仰継承に影響を与えると考えられる父母の信仰態度や宗教的社会化の影響について検討する。これらの分析を通して、創価学会の二世信者の信仰継承のあり方について概略的な知見を得ることが本稿の課題である。

第2章 回答者の属性と活動状況

この章においては、調査対象者の属性について概観する。これらの情報は、次章以降の分析結果を読み取る際の参考となる。ここで示すことのできる結果はほんの一部であるが、まず、本稿の焦点となる一世信者と二世信者に着目し、その比率、年齢構成、また入会年齢を検討する。また、回答者が実際に活動的会員であることを活動状況から確認する。

2-1 回答者の属性

本調査の回答者全体では、一世信者が391名(48.6%)、二世信者が413名(51.4%)であった。半数以上を二世信者が占める。所属部署別(図2-1)にみると、男女青年部に二世信者比率が高い。特に女子部については8割が二世信者である。男子部、女子部に所属する人は壮年部、婦人部より年齢が若い。年齢によって一世/二世比率が異なるのだろうか。

年齢別の一世/二世比を示した図2-2からはおよそ年齢が高くなるにつれ一世信者の比率が高くなることが読み取れる。二世信者は20・30歳代合わせて160名なのに対して、一世信者の同世代は71名に過ぎない。平均年齢は、一世信者は53.3歳、二世信者は43.1歳であり、10歳以上の差がある。また、各部の平均年齢も、すべての部署について一世信者の平均年齢は二世信者よりも上である。男子部は31.8歳と30.5歳、女子部は29.1歳と28.0歳で双方ともおよそ1歳差であるが、婦人部は55.3歳と48.4歳で7歳差、壮年部は59.0歳と50.3歳でおよそ9歳という大きな年齢差がある。信者の子ども世代である

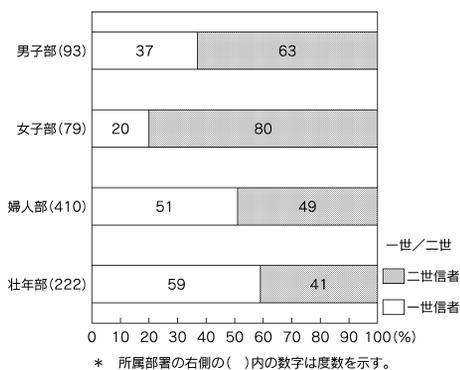


図2-1 所属部署別の一世/二世比率

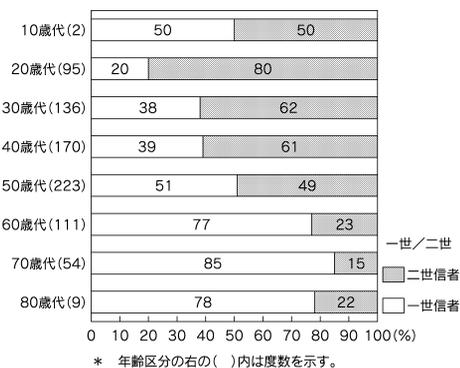


図2-2 年齢別の一世/二世比率

二世信者の年齢が若いことは当然の結果であるが、年齢が若くなるに連れて二世信者率が高まることは、二世信者の信仰継承率が高い可能性、あるいは一世信者のリクルート率が低い可能性のいずれか、または両方を意味していると考えられる。以下ではこの点を検討してみたい。

信仰継承率については次章で検討するとして、ここでは、一世信者がどのような年代にリクルートされているのか、また二世信者の入会がどのように行われているのかを推測するために、入会年齢について検討する(図2-3)。

一世信者の74%が20・30歳代に入会している。各年齢別に一世信者の入会年齢を分析した結果、80歳代を除くすべての年齢層で20・30歳代の入会が60%以上を占めた。これは、創価学会が一貫してこの年齢層をリクルートの対象としてきた反映とも考えられる。

二世信者は3割が0歳児入会である。入会年齢別に見ると、0歳児入会の8割が現在20・30歳代であった。年齢別に分析すると、20歳代の64%、30歳代の55%、40歳代の20%が0歳児入会である(50歳代は1名のみ)。1970年代以降に0歳児入会をする人が増えている。一方で、20歳代以上になってから入会したとする二世信者も2割程度いることから成人してからも親の入会に影響されて入会する人々がいることを推測することができる。

次に、社会的属性について確認する。学歴の比率は、中学校18.9%、高等学校43.5%、短大・高専・専門学校25.8%、4年制大学9.6%であった。平成12年度『国勢調査』(総務省)の比率は、中学校22.0%、高等学校41.6%、短大・高専・専門学校24.6%、4年制大学8.2%なので、ほぼ全国比率とかわりない学歴構成である。所属別に見ると(図2-4)、男女青年部は短大や4年制大学以上の学歴比率

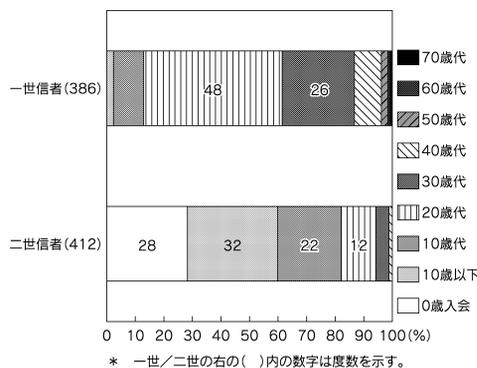


図2-3 一世/二世別の入会年齢

が高い。基本的に年齢が若いほど学歴が高くなる傾向があるので、一世/二世間でも二世信者の方が学歴の高い傾向がある。

職業（表2-1）については、有配偶女性の非就業率に着目する。離婚・死別・未婚の婦人部80名（19.2%）を除いた有配偶女性300名のうちの56.3%が非就業者であった。総務省統計局『労働力調査』（平成14年10～12月度）によれば有配偶女性（妻）の就業者率は49.5%である。創価学会の有配偶女性の非就業率は高い。婦人部は日常的な創価学会活動を中心に担っている部署であるが、これらの非就業者である婦人部は時間的に余裕があるために活動を活発に行えるだろう。

2-2 回答者の活動状況

教学資格については、創価学会の活動の流れの中で随時教学試験が行われるため、継続的活動者であればなんらかの資格を持っている可能性が高い。在籍期間15年以上が9割を占める婦人部・壮年部では7割から8割が教授補以上の資格を持っている。男女青年部も15年以上在籍する人が8割を占め、そのほとんどが二世信者である。二世信者は一世信者と

比較すると教学資格が高い傾向がある。その影響もあり、男女青年部では教学資格が青年3級未満の低い層と青年2級以上の高い層の二つに分かれている（図2-5）。

回答者の半数以上が地区・支部の幹部である（図2-6）。地区・支部の幹部は、地域の活動を日常的に支え、活動者の基盤を担っている人々である。これらの人々が学会員の活動者の大半を占めることがこの結果から推測できるとともに、以降の分析結果も

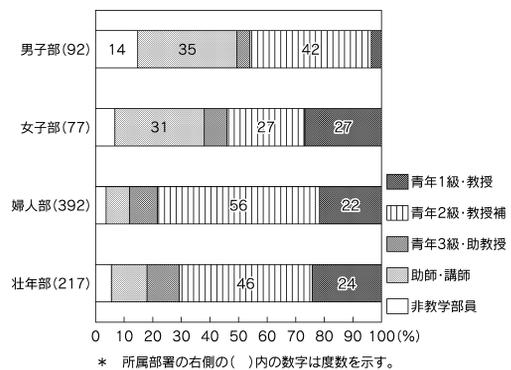


図2-5 所属部署別の教学資格

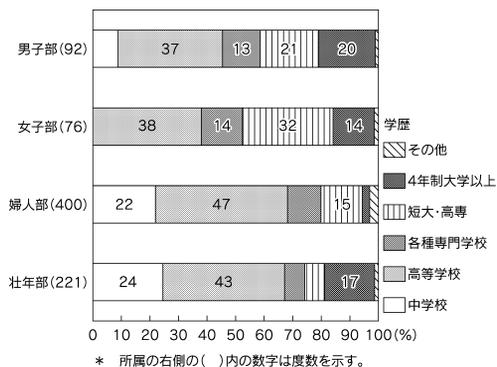


図2-4 所属部署別の学歴

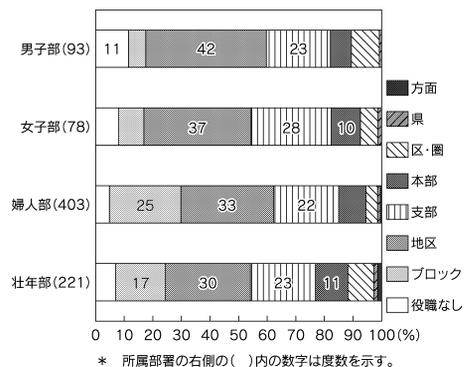


図2-6 所属部署別の役職

表2-1 職業と所属部署

職業	所属部署 (%)				
	男子部	女子部	婦人部	壮年部	合計
経営者・役員	1.1	0	1.6	9.7	3.6
雇用従業者	67.4	63.6	9.1	49.1	32.8
自営業・家族従業者	9.7	2.6	5.5	15.3	8.5
派遣社員・パート・臨時雇い	12.0	18.2	23.0	8.8	12.2
専業主婦・主夫	0	3.9	47.8	0.5	24.3
学生	0	5.2	0	0	0.5
無職	6.5	2.6	11.0	13.0	10.2
その他	3.3	3.9	2.1	3.7	2.9
%基数 (人)	92	77	383	216	768

主にこれらの「現場」の人々の声を反映しているものと考えることができる。

全体の8割が毎日勤行・唱題を実行している(図2-7)。一世/二世間には有意な差はなかったが、所属部署で見ると婦人部は毎日行っている人が多く、男子部は少ない。一日の唱題時間に関しては、一世信者で2時間以上行う人の割合が14%なのに対し、二世信者9%、5分以下の人の割合は一世信者10%なのに対し、二世信者15%である。二世信者の唱題時間は短い傾向がある。所属部署別では、他の部では1時間以上唱題する人の割合が30%前後なのに対して、婦人部は56%に達しており、全体的に唱題時間の長い人が多い。唱題の点では一世信者の婦人部が最も活発である。

会合への参加頻度を見ると半数以上が週に2日以上会合に参加している(図2-8)。特に男子部と婦人部は4割前後の人がほぼ毎日会合に参加している。回答者の多くが日常的に学会活動に参加している人々であることが確認できる。回答者の多くは教学資格の点でも、唱題の点でも会合参加の点でも活動的信者とみなせる。ここでは、本調査の結果はあ

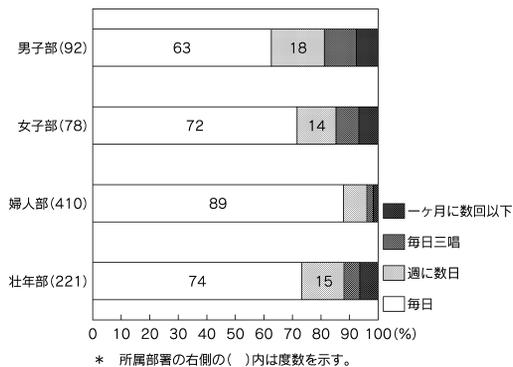


図 2-7 所属部署別の勤行・唱題頻度

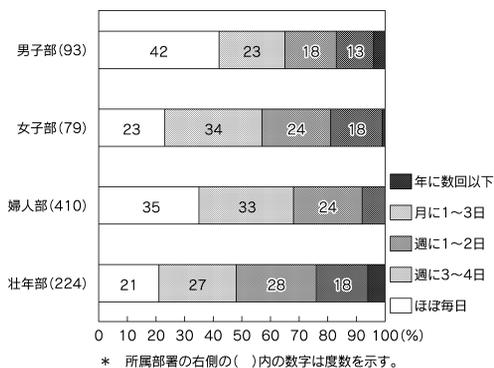


図 2-8 所属部署別の会合参加頻度

くまでも活動的信者に関する知見という限界があることを確認しておきたい。

第3章 回答者の家族状況

この章では、信仰継承の基盤となる創価学会員の家族状況の特性について知るため、本調査の回答者の家族状況に関して分析結果を報告する。

3-1 回答者の世帯構成

回答者の世帯構成の比率(図3-1)は、単独世帯が6.2%、核家族世帯が74.4%、その他の親族世帯が18.8%、非親族世帯が0.5%であった(N=759)。平成12年度『国勢調査』によると、全国では単独世帯は26.5%、核家族世帯の割合は59.2%、その他の親族世帯は13.9%、非親族世帯は0.4%、対象地である札幌市では単独世帯32.1%、核家族世帯61.6%、その他の親族世帯5.9%、非親族世帯0.5%である(総務省統計局)。全国比率および札幌市の比率と照らし合わせると、回答者の核家族世帯割合とその他の親族世帯割合が高く、単独世帯数は少ない。3世代以上が同居する世帯については、札幌市では3.4%であるのに対し、回答者の世帯では14%近くを占めている。核家族世帯の比率は非常に高いが、

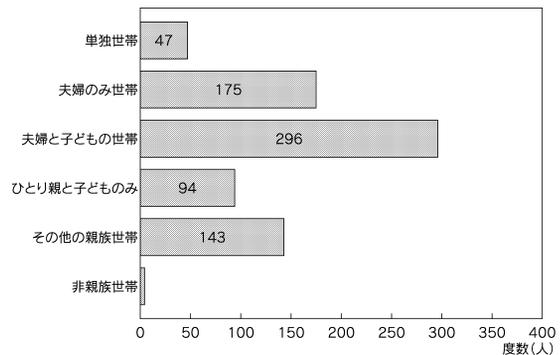


図 3-1 世帯構成

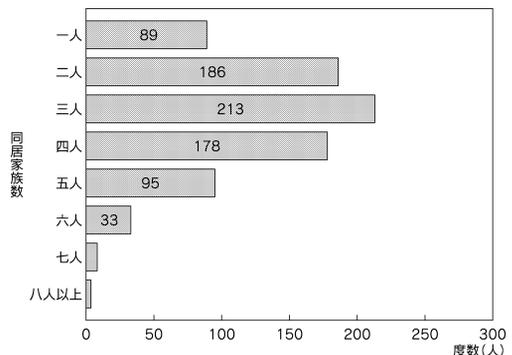


図 3-2 同居家族数

3世代家族世帯で暮らしている家族の割合もまた高い。回答者の世帯規模(図3-2)をみると、3人世帯が26.4%、2人世帯が23.1%、4人世帯が22.1%である(N=806)。平成12年度『国勢調査』の結果では、1人世帯が34.1%、2人世帯が27.1%、3人世帯が18.3%、4人世帯が15.1%の順となっている。全国比率と比較すると回答者は、家族と暮らしている比率が高く、その世帯規模は大きい。図3-3は、一世/二世別に家族・親族の中にいる学会員の人数を概算で算出した結果である。予想通り、二世信者は一世信者よりも家族会員数が多い傾向にある。

3-2 回答者の信仰継承に対する意識

図3-4は子どもに信仰を継承させるには何が必要かをたずねた結果である。回答者の大半が他の学会員から子どもへの働きかけ(組織活動上の取り組み)ではなく、親の宗教的社会化(親が積極的に信仰を伝える)や信仰活動(親の活動している姿を子どもに見せる)を重視する選択をした。この結果から回答してくれた学会員が信仰継承の責任が教団よりも家族にあると考えていることが伺える。信仰継承が家族の責任とされれば、二世信者にとって、創価学会の信仰は「家の宗教」としての位置づけが強くなると思われる。

図3-5は二世信者に自分が信仰を継承するうえでもっとも影響が大きかった要素をたずねた結果である。男子部は他の部に比べて「自分自身が信仰の大切さに気がつくこと」を重視する傾向が強い。他の部では「母親の信仰の強さ」がもっとも選択される比率が高い項目だった。それらに対して、「父の信仰の強さ」はあまり信仰継承に影響を与えていない。また、男性は女性よりも成人してからの自分の活動を重視する割合が高い。図3-4と図3-5の結果を合わせて考えれば、親の宗教的社会化というときに想定されているのは父親ではなく、第一には母親の

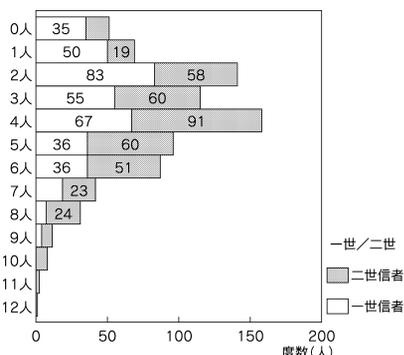


図3-3 一世/二世別の家族学会員出現数

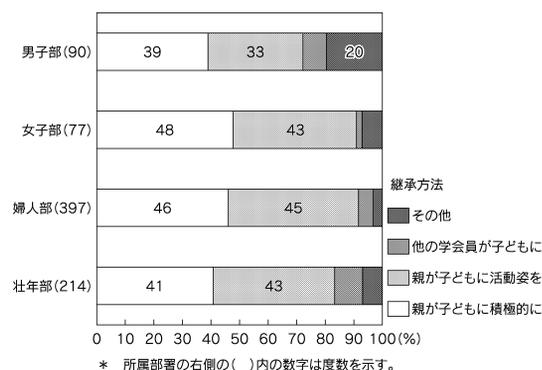


図3-4 所属部署別の継承方法

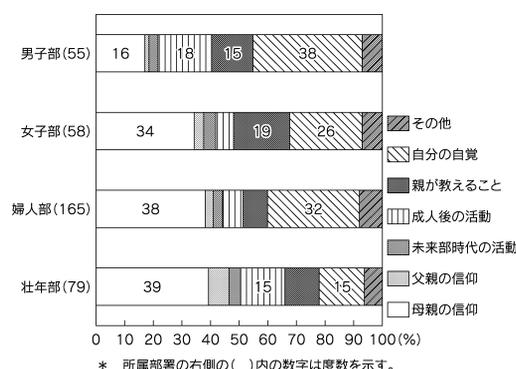


図3-5 信仰継承に影響が大きかった要素

宗教的社会化であることが推察される。次章では、二世信者の中学生時代に焦点を当てて、信仰継承におよぼす父母の信仰態度・宗教的社会化について検討する。

第4章 二世信者の信仰継承

この章では、調査から得られた信仰継承率と二世信者の中学生当時の活動状況や父母の信仰態度および宗教的社会化が信仰継承に与える影響について検討する。

4-1 信仰継承率

回答者のうち、子どもがいると答えた人は602名(有効票の74.6%)であった。これらの人に「子どもの全人数」と「18歳以上の子どもの人数」、「18歳以上の子どものうち創価学会員として活動を行っている人数」をそれぞれ尋ねた。信仰継承率は、18歳以上の子どもの人数の総計を子どもの会員数の総計で割ると求められる。18歳以上の子ども数から得られる回答者家族の信仰継承率は、65.9%である。また、二世信者に対しては「きょうだいの人数」と「創価

学会員として活動しているきょうだいの人数」を尋ねた。18歳以上の子どもに対して行った方法と同様にして二世信者家族における信仰継承率を割り出すことができる。きょうだい数から得られる二世信者家族における信仰継承率は69.5%である(表4-1)。

回答者の子どもから割り出された信仰継承率と二世信者のきょうだいから割り出された信仰継承率ともに、調査票調査の回答から得られた信仰継承率はおよそ7割近い。この結果を一般的な信仰継承率とすることはできないが、札幌における活動的創価学会員家族においては6割以上の比較的高い信仰継承率が見込まれるといえそうである。

4-2 中学生当時の活動継続意志と当時の活動²⁾

ここでは、二世信者が中学生当時「成人後も創価学会活動を続けようと思っていた」か否か(以下、活動継続意志)に着目し、二世信者の信仰継承のパターンを見ていく。

図4-1は中学生当時の活動継続意志のなかった人が、その後、創価学会活動から離れる割合が高いかどうかをみるためにクロス集計した結果であ

る³⁾。活動継続意志がなかった人はその後、活動から離れた経験を持つ割合が高い(p<0.001)。そこで、活動継続意志の有無によって中学生当時の中等部会合への参加の有無に差が生じるかみた(図4-2)⁴⁾。活動継続意志のなかった人の方が中学生当時も活動に参加していない割合が高い(p<0.05)が、活動継続意志を持っていなかった人でも7割が中等部の会合に参加していたことがわかる。これらの人々は将来的に活動を続ける意志を持っていなかったのに、中学生当時は学会活動に参加していたのである。本人の活動への積極性が異なっていたのだろうか。

中学生当時の本人の活動状況に関する質問項目について主因子法により因子分析を行った(表4-2)。共通性の低い項目について除外した後、最終的にひとつの因子が抽出された。

各項目について、「まったくその通り」から「まったくあてはまらない」まで4段階をそれぞれ1~4点として集計し、6~24点の活動積極性得点とする(得点が低いと活動積極性が高い)。表4-3によれば、活動継続意志のなかった人の活動積極性はあった人よりも低い水準にある(p<0.001)。所属部署別を見ると(表4-4)、男性(壮年部・男子部)より女

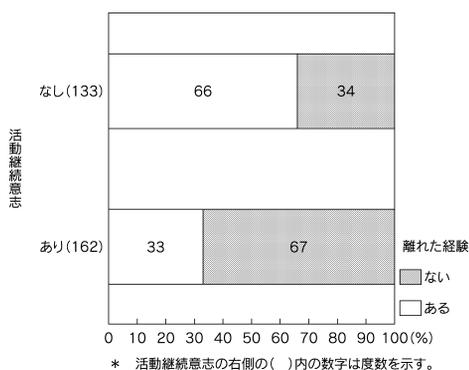


図4-1 離れた経験と活動継続意志

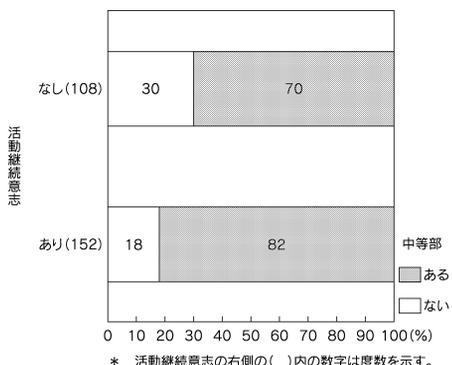


図4-2 活動継続意志の有無別の中等部参加率

表4-1 信仰継承率

18歳以上の子ども数	865人
18歳以上の子どもの会員数	570人
信仰継承率	65.90%
きょうだい数	1200人
きょうだい会員数	834人
信仰継承率	69.50%

表4-2 中学生当時の活動状況(活動積極性)

	第一因子
会合には積極的に参加していた	0.812
学会員として誇りを持っていた	0.807
尊敬する学会員がいた	0.747
池田先生を尊敬していた	0.725
勤行・唱題を自発的にしていた	0.702
教学に興味があった	0.685
寄与率	55.929
因子の解釈	活動積極性

因子抽出法：主因子法

表4-3 活動継続意志の有無別の活動積極性得点

活動継続意志	平均値	度数	標準偏差
なし	18.35	131	3.39
あり	11.52	163	3.11
合計	14.56	294	4.69

表 4-4 所属部署別の活動積極性得点

所属部署	平均値	度数	標準偏差
男子部	16.42	52	4.62
女子部	14.00	59	4.95
婦人部	13.90	127	4.73
壮年部	14.85	52	4.04
合計	14.54	290	4.71

性（女子部・婦人部）の方が活動積極性が高い傾向がある（ $p<0.05$ ）。

4-3 父母と家庭状況の影響

父母の信仰態度について尋ねた項目の因子分析の結果から三つの因子が抽出された（表 4-5）。第一因子は「父親の信仰態度」である。第二・第三因子は信仰態度と宗教的社会的化の二つの因子に分かれたが、どちらも「母親の信仰態度」である。そこで、

「まったくその通り」から「まったくあてはまらない」まで4段階を1～4点として、第二・第三因子を合わせた7～28点の「母親の信仰態度」得点と「父親の信仰態度」得点を出し、活動継続意志の有無による平均値の差をみた（得点が低いと信仰態度が強い）。活動継続意志があるグループの方が父母の信仰態度が強い（表 4-6：父母とも $p<0.01$ ）。また、父母の得点を比較すると父親よりも母親の信仰態度が強く、父よりも母の方が活動熱心である傾向が読み取れる。

第5章 結語 ― 考察と知見

第2章で回答者の属性について検討した。一世/二世比は全体では半々だが、所属部署別に見ると男女青年部は二世信者の割合が高かった。これは、年齢が若くなればなるほど二世信者比率が高まる傾向が反映された結果である。ただし、一世信者の入会年

表 4-5 父母の信仰態度および宗教的社会的化についての因子分析結果

	第一因子	第二因子	第三因子
父は池田先生についてよく話した	0.860	0.192	0.054
父は信仰体験をよく話した	0.858	0.189	0.055
父は勤行するようによく言った	0.847	-0.046	0.289
父は教学するようによく言った	0.834	0.002	0.254
父はよく学会活動していた	0.832	0.217	-0.058
父はよく勤行・唱題していた	0.819	0.201	-0.016
父は会合に行くようによく言った	0.806	0.005	0.279
母はよく学会活動していた	0.125	0.828	0.201
母はよく勤行・唱題していた	0.119	0.827	0.180
母はよく信仰体験を話した	0.069	0.760	0.313
母は池田先生についてよく話した	0.160	0.747	0.319
母は勤行するようによく言った	0.144	0.408	0.757
母は教学するようによく言った	0.180	0.353	0.720
母は会合するようによく言った	0.123	0.481	0.680
因子の解釈	父の信仰態度	母の信仰態度	母の宗教的社会的化
寄与率	35.939	22.779	14.719
累積寄与率	35.939	58.718	73.437

因子抽出法：主因子法 回転法：Kaiserの正規化を伴うバリマックス法

表 4-6 活動継続意志の有無別の父母の信仰態度得点

活動継続意志		母親の信仰態度得点	父親の信仰態度得点
なし	平均値	14.31	19.59
	度数	131	111
	標準偏差	5.18	5.97
あり	平均値	11.61	17.31
	度数	153	144
	標準偏差	4.45	6.71
合計	平均値	12.86	18.30
	度数	284	255
	標準偏差	4.97	6.49

齢の70%は20・30歳代が占めるため、8割という女子部の二世比率の高さの原因は単なる年齢効果だけではない可能性もある。女子部は40歳代未満の未婚女性の部署であるから、これらの女性に対するリクルートが積極的に行われていないか、創価学会がこの世代の未婚女性に強い魅力を提供していない可能性が考えられる。回答者の社会的属性は、対象地の特性もあり、学歴・職種ともに全国的な比率と同等か少し高めの構成であった。活動状況については、役職・教学資格から、回答者が組織の基盤を占めている人々であることが推測できた。

第3章では、回答者の家族構成と信仰継承に関する認識に関して検討した。回答者の74%が核家族世帯であり、単独世帯は少なかった。活動的信者になるには、家族での生活することが重要な要素である可能性がある。また、二世信者は家族・親戚に学会員を持つことが多いために、創価学会の信仰が個人的に実行する新奇な信仰ではなく、墓の継承も含めて代々引き継いでいく家族の宗教として捉えられる傾向も強くなるだろう。信仰継承の責任主体として親を第一に考える回答者が多いことも二世信者の宗教意識に影響を与えていると思われる。特に、その社会化の担い手として重要と見られているのは母親であり、信仰継承の責任の所在にはジェンダー差があることが確認できるのである。

第4章では、信仰継承におけるジェンダー差についても検証した。基本的には、活動積極性が高い人、また父母の信仰が強かった人に、活動継続意志を持つ比率が高い。父母の信仰の強さが信仰継承に対してプラスの効果を持っていることが確認された。しかし、活動積極性得点では女性より男性の方が低い傾向が見られたこと(特に青年層である男子部)、父母の信仰の強さにおいても母親の信仰得点の高さが父親よりも高かったことなどから、信仰継承のあり方には男女差や年齢差があることが確認できる。

得られた重要な知見としては、信仰継承のあり方を決める要因(性差・年齢差)に関する資料が得られたことと、これまで十分に解明されてこなかった信仰継承率について、調査票調査の結果から6割強というある一定の数値を算出できたことがあげられる。これらの結果は、調査設計上の限界はあるものの、今後の研究のひとつの目安となるだろう。

本稿で検討できた分析結果は調査のほんの一部であり、かつ本稿では得られた知見の背景にある要因やメカニズム、従来の宗教社会学的研究に貢献する意義などを十分に検討する余裕がなかった。これらの点を踏まえた成果を出すことが今後の課題であ

る。

【註】

- 1) 設問では、「配偶者」などの続柄別に学会員である人のところに丸を付けてもらった。これらの続柄のなかで丸のついた数を足し合わせたものが図3-3の結果である。したがって、これは家族会員数というよりも続柄の多様性であるが、便宜的に人数として表記した。
- 2) これ以降15歳以前に入会した二世信者のみを「二世信者」として分析の対象とする。
- 3) この結果は回顧的な回答に依存している。活動から離れた経験のある人は、過去の自分の活動について消極的に評価する可能性がある。つまり、関連性が見出されても、一度離れた経験をもつ人は過去の活動状況を消極的だったと解釈する傾向を示している可能性がある。しかし、ここでは便宜的に活動継続意志を当時の意志とみなして分析する。
- 4) 中等部への回答については、有効票数が少ない。ここでの解釈には留保が必要である。

【参考文献】

紙幅の都合上割愛。統計資料は総務省統計局『国勢調査』、『労働力調査』。

【謝辞】

本調査の実施にあたっては、北海道創価学会広報部の方をはじめ、調査票配布や回答など多くの創価学会員の皆様の全面的な御協力をいただいた。記して感謝したい。また、本稿のために労をとってくださった酪農学園大学の皆様にも感謝申し上げたい。尚、本調査は平成14年度科学研究費(日本学術振興会特別研究員奨励費)の助成を受けて行われた。

【英文要約】

This paper is a report on part of the analytical results of a questionnaire survey conducted with Soka Gakkai members living in Sapporo. This survey was carried out in November 2002. The purpose of this survey is to gain valid data to illuminate the process of faith succession of the second generation of Soka Gakkai members from their parents. Chapter Two clarifies the respondents' social attributes and the situation of their activities in Soka Gakkai. Chapter Three examines the respondents' family situations as the

foundation of faith succession and their awareness of it. It also presents a calculation of the faith succession ratio. Chapter four examines the differences between those who had the intention to continue Soka Gakkai activities in junior high school and those who did not. The survey is limited to only second-generation members. The faith succession ratio was 65-69%, which may be considered a rather high figure. Such a high ratio could derive from the fact that the survey was given to active members. Concerning the faith succession of the second generation, there was a relatively high ratio of becoming distant

from Soka Gakkai activities later in life for those who did not have the intention of continuing the activities while in junior high school. Those who had the intention to continue the activities have been actively participating in Soka Gakkai activities from their junior high school days. They tend to be religiously influenced by their parents. However, as faith succession in the above data seems to differ by age and gender, it was also confirmed that further detailed analysis is required to clarify which factors might affect their faith succession.